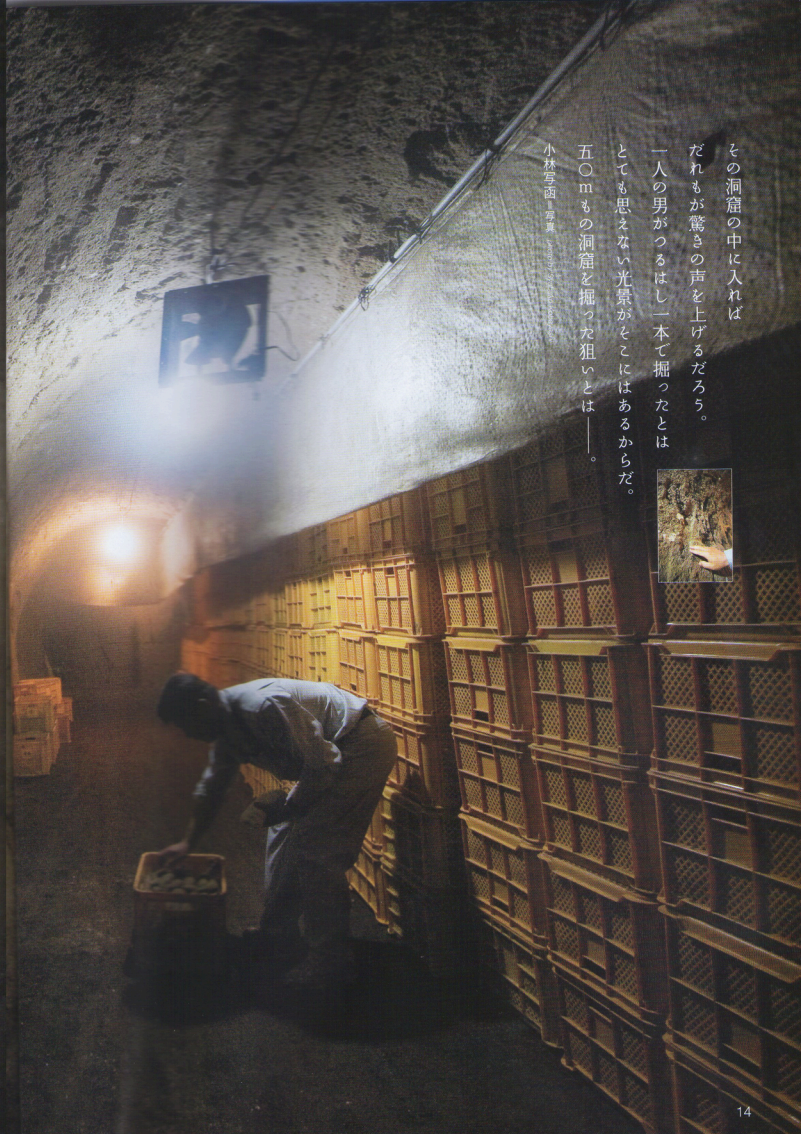


その洞窟の中に入れば  
だれもが驚きの声を上げるだろう。  
一人の男がつるはし一本で掘ったとは  
とても思えない光景がそこにはあるからだ。

五〇mもの洞窟を掘った男とは――。

小林 幸雄 / 写真家



# 五〇mの 洞窟を 掘った男



扉を開けると、そこには夏夜の響きを  
忘れさせるひんやりとした別世界が広  
がっていた。明かりに照らし出された壁  
面には無数のつるはしの跡が刻まれてい  
る。こんなにも広く、深いとは、しかもこ  
の洞窟をたった一人で掘ったとは、想像  
をはるかに超えていた。

鹿児島県曾根市。シラス台地が広がる  
鹿児島県曾根市。シラス台地が広がる  
鹿兒島県曾根市。シラス台地が広がる  
この地で農業を営む吉川和敏さん(48)  
が、つるはし一本で、至がかりで掘った  
全長五〇mにも及ぶ洞窟の内部は、三  
〇℃を超える真夏日でも一五℃前後、湿  
度も一定に保たれている。「ここで昼寝  
をしたら最高ですよ」と吉川さんは笑う  
が、昼寝をするためにこの洞窟を掘った  
わけでももちろんない。サツマイモを貯  
蔵するためだ。

吉川さんは一九九四年に三〇歳で農機  
メーカーを退職し、実家の経営を引き継  
ぐかたちで就農した。当時「ha」だった経  
営規模の拡大を考えた吉川さんが初めに

したことが、自宅の  
裏山にこの洞窟を  
掘ることだった。  
一人を雇用して経  
営規模を拡大しよ  
うとする場合、年間  
の労働時間をいか  
に単純化するかが  
肝になります。その  
ためには、作業を増  
やすことに加えて

雨天時にもできる作業をつくることが必  
要です。サツマイモは長期間の貯蔵がで  
きますが、夏から秋にかけて収穫したも  
のを翌年の梅雨時まで貯蔵する技術や考  
えはこの辺りにはなかった。それを可能  
にしたのがこの洞窟なんです。  
さらにこの洞窟が偶然にも、吉川さん  
を農産加工へと進出させるきっかけをつ  
くった。その加工品とは――。

（二〇ページから詳細記事）